

春はあけぼの



<sup>はる</sup>春はあけぼの。

やうやう白くなりゆく山  
際、少しあかりて、紫だち  
たる雲の細くたなびきた  
る。

<sup>なつ</sup>夏は夜。

月の頃はさらなり。  
闇もなほ、螢のおほく飛び  
ちがひたる。  
また、ただ一つ二つなど、

ほのかにうち光りて行く  
もをかし。

雨など降るもをかし。

<sup>あき</sup>秋は夕暮れ。

夕日のさして山の端いと  
近うなりたるに、鳥の、寝  
どころへ行くとて、三つ四  
つ、

二つ三つなど飛び急ぐさ  
へあはれなり。

まいて、雁などのつらねた

るが、いと小さく見ゆるは、  
いとをかし。

日入り果てて、風の音、虫  
の音など、はた言ふべきに  
あらず。

<sup>ふゆ</sup>冬はつとめて。

雪の降りたるは言ふべき  
にもあらず、  
霜のいと白きも、またさら  
でもいと寒きに、  
火など急ぎおこして、炭持

てわたるも、いとつきづき  
し。

昼になりて、ぬるくゆるび  
もていけば、火桶の火も、  
白い灰がちになりてわろ  
し。

げんだいごやく  
(現代語訳)

春は、あけぼのの頃がよい。  
だんだんに白くなっていく山際が、少し明るくなり、紫がかった雲が細くたなびいているのがよい。

夏は、夜がよい。満月の時期はなおさらだ。<sup>やみよる</sup>闇夜もな

およい。<sup>ほたる</sup>蛍が多く飛びかっているのがよい。一方、

ただひとつふたつなどと、  
かすかに光ながら蛍が飛  
んでいくのも面白い。雨な  
ど降るのも <sup>おもむき</sup> 趣 がある。

秋は、夕暮れの時刻がよい。  
夕日が差して、山の端がと  
ても近く見えているところ  
に、からすが寝どころへ  
帰ろうとして、三羽四羽、  
二羽三羽などと、飛び急ぐ  
様子さえしみじみともの

を感じさせる。ましてや雁<sup>かり</sup>などが連なって飛んでいるのが小さく見えている様は、とても趣深い。日が沈みきって、風の音、虫の音など、聞こえてくるさまは、またいいようがない。冬は、朝早い頃がよい。雪の降ったのはいうまでもない。霜のとても白いのも、またそうでなくても、とても寒いのに、火を急いでつ



けて、炭をもって通っていくのも、とても似つかわしい。昼になって、寒いのがゆるくなってくる頃には、火桶の火も、白く灰が多くなってしまう、よい<sup>かん</sup>感じがしない。